

右方転移と談話機能*

木 村 宣 美

0. はじめに

日本語は述語 (predicate) が文末に生じる主要部後置型 (head-final) 言語であるが、(1b) に見るように、ある要素が本来生じる位置ではなく、述語に後続する位置に生じることがある。

- (1) a. 君は、本当にダメだね。
b. 本当にダメだね、君は。(久野 1978:67-68)¹

(1b) では、(1a) の主語「君は」が、述語「本当にダメだね」に後続する位置に生じている。この構文は、右方転移 (right dislocation) 文と呼ばれ、述語に後続する位置に置かれる右方転移要素が、本来の位置から文末への右方移動 (rightward movement) が適用されて導かれる (Haraguchi (1973)) と分析された構文である。ただし、現時点では、Minimalist Program の理論的な精緻化のもと、右方転移文の派生に対して、概略、動詞句前置 / 残余句移動等の左方移動 (leftward movement) によって導かれるとする移動分析 (黒木 (2006), Fukutomi (2006)) と移動規則のみの操作で導かれるのではなく、文の部分的繰り返しによって導かれるとする移動と削除に基づく分析 (久野 (1978), Abe (2004)) の2種類の分析が提案されている。

右方転移文の右方転移要素の談話機能 (discourse function) に関して、久野 (1978) は、日本語の右方転移文を分析する際に、文の部分的な繰り返しと削除に基づく分析を提案し、右方転移要素が担

* 本稿は、日本中部言語学会第58回定例研究会 (平成24年12月8日 静岡県立大学) において口頭発表した右方転移文の談話機能に関する内容に加筆・修正を施したものである。なお、本研究は、平成22年度－平成24年度日本学術振興会科学研究費助成事業 (科学研究費補助金) ((基盤研究 (C) 研究課題『句構造の非対称性・線形化と構造的依存関係に関する理論的・実証的研究』(課題番号22520487)) に基づく研究成果の一部である。

¹ (1b) のような文に対しては、英語では right dislocation sentences, postposing sentences 等、日本語では右方転移文、後置文、右方転位文等の用語が用いられているが、本稿では、右方転移文という用語を用いることにする。なお、右方転移との用語を用いるが、これは、右方移動が関与することを主張するものではない。また、本稿では、述語に後続する位置に生じる要素を右方転移要素あるいは後置要素と呼び、下線を引くことにする。なお、英語の場合には、本来の位置に生起する代名詞にも下線を引くことにする。

う談話機能は旧情報であると分析していると考えて良いように思われる。しかしながら、最近の研究成果では、右方転移文の後置要素の談話機能が、旧情報ではない場合があることが報告されている。本稿の目的は、このような右方転移文の後置要素の談話機能に関する研究動向を踏まえ、動詞に後続する位置に生じる右方転移要素が、どのような談話機能を担っているかを概観することにある。

1. 右方転移要素の談話機能

本節では、右方転移文の右方転移要素が、情報構造上、どのような談話機能を担っていると分析されてきたかを概観することにする。

1.1. 旧情報としての右方転移要素

Rodman (1997/1974) では、カジュアルな発話 (casual, relaxed speech) で用いられるのが一般的な右方転移には、話者がこの構文を選択する三つの理由があることが指摘されている。第一の理由は、指示物 (referent) をより明示的にするためである (The speaker utters a pronoun and then suddenly realizes that his audience may not be aware of the referent he intends for the pronoun, so at the end of the clause containing that pronoun he makes the reference more explicit.)。

- (2) He told a number of lies to the Grand Jury, Ed Reinecke. (Rodman 1997/1974:47)

話者は代名詞を含む文を発したが、聞き手にとって、その指示物が明らかではないかも知れないと思い、文末に名詞句を加え、伝えたいことを明瞭なものとするために、右方転移がなされる。

第二の理由は、音韻的に長い名詞句を、強勢 (stress) に基づき、強調あるいは対照させるためである (Right dislocations are also used to emphasize or contrast a phonologically lengthy noun phrase by means of stress.)。

- (3) I told her to leave instantly, the woman that did an obscene imitation of me on the Merv Griffith show. (Rodman 1997/1974:48)

話者は名詞句ではなく代名詞を用いて、文末で代名詞が指し示す指示物をもつ名詞句に強勢を置くために、右方転移がなされる。

第三の理由は、音韻的に長いあるいは重い名詞句が文内にあり、文理解が困難を極めるような状況を避けるためである (One may use a right dislocation to avoid the situation of having a phonologically lengthy or heavy noun phrase occur in a position of a sentence where it is felt to be awkward.)。

- (4) We elected him president, the most outrageously stupid and dishonest man in the entire country.

(4) では、the most outrageously stupid and dishonest man in the entire country が直接目的語の位置にあることにより、文理解に困難が伴うことが予想される。これを回避するために、直接目的語の位置に代名詞を置き、文末に代名詞と同一の指示物をもつ名詞句を置くことが選択される。

Huddleston & Pullum (2002) も、英語の右方転移の機能が二つあることを指摘している。一つは、Rodman (1997/1974) が指摘しているように、発話処理機能 (utterance processing function) で、指示物をはっきりさせる clarification of reference である。次の (5) を例に取り、この点を考えてみよう。

- (5) a. My dad was telling my uncle about how you had said you'd solve the financial problems of your business. It took a while to explain it, because [he didn't really understand what you planned to do, my uncle].
- b. I get back strain from carrying this heavy backpack, especially when I have to take home my huge science book and all of my lit folders. [It's ridiculously heavy, my science book,] and it's really not good for me to be hauling it back and forth all the time.

(Huddleston & Pullum 2002:1411)

これは、代名詞を発話したが、それが何を指し示すのか、明確ではないのではないかと思ひ、文末 (clause-final position) に、この点をはっきりさせる名詞句等の情報を付け加える機能である。いわば、付け足し (afterthought) の一種である。例えば、(5a) の代名詞 he の潜在的な先行詞は my dad と my uncle の二つある。右方転移された要素 my uncle で、その指示物がいずれであることを明確にしている。同様に、(5b) の代名詞 it の可能な先行詞は my huge science book と this heavy backpack の二つある。右方転移された my science book が、この曖昧性を解消する役割を担っている。

Huddleston & Pullum (2002) が指摘する二番目の機能は、右方転移要素が談話機能上の旧情報 (discourse-old information) を表すことである。この点を、次の (6) を例に取り、考えてみよう。

- (6) a. I had to take my car in for service again. [It's really in bad shape, that car.]
- b. Dad took your old desk out to the curb to be taken away with the trash, but forgot that I had been keeping all my important papers in there. Luckily Diana checked the drawers and thought that the papers looked important, so she took them out. [*He looked them over, our attorney.]

(Huddleston & Pullum 2002:1412)

(6a) では、右方転移された that car は、先行談話において導入 (evoked) されている。他方、(6b) では、our attorney はこの談話において未だ登場していない新しい誰かに言及していて、この談話では右方転移は不適切である。右方転移された要素が旧情報ではないからである。

日本語の右方転移文にも、英語と同様の談話機能上の制約が課されている。例えば、久野

(1978)では、日本語の右方転移文(久野(1978)では、後置文)に関して、次のような伝達機能があることが指摘されている。

(7) 後置文の伝達機能

後置文において主動詞の後に現われる要素は、

- (i) 話し手が最初、聞き手にとって、先行する文脈、或いは非言語的文脈から、復元可能であると判断して省略したものを、確認のため、文末で繰り返したのか、
- (ii) 補足的インフォメーションを表わすものに
限られる。(久野 1978:68)

右方転移文(後置文)は、それが現われる文脈において、右方転移(後置)要素なしでも意味が通じる時のみ、用いることができることが指摘されている。この点を、次の(8)を例に取り、考えてみることにしよう。

(8) a. A: 太郎は、昭和何年に生まれた？

Ba: 昭和30年に生まれた。

Bb: *生まれた、昭和30年に。

b. A: 君は、どちらの本が面白かった。

Ba: この本が面白かった。

Bb: *面白かった、この本が。(久野 1978:69)

(Bb)が(A)に対する応答として不適格なのは、動詞の後に現われる要素「昭和30年に」や「この本が」が復元可能なインフォメーションでも、補足的なインフォメーションでもないからである。すなわち、英語と同様に、右方転移要素は、談話機能上の旧情報でなければならないことがわかる。

1.1.1. 不定名詞句の右方転移

右方転移要素は、談話機能上の旧情報でなければならないとする条件から、疑問詞が右方転移されることはないということが当然の帰結として導かれる。疑問詞は談話機能上の新情報(discourse-new information)だからである。

(9) a. *お宅に伺いましょうか、何日に。

b. *昼食を食べましたか、何処で。(久野 1978:71; cf. 高見 1995:238)

(9a)では「何日に」、(9b)では「何処で」が右方転移されているが、旧情報でなければならないとす

る条件に違反し、不適格である。

Gundel (1977/1974:120-121) は、英語で右方転移される要素は、左方転移と同様で、謂わば、what about x の疑問文に対する答えであり、通例、x が右方転移される要素であることを指摘している。

(10) a. It really depresses me, this room.

b. What about this room?

すなわち、(10b) の疑問文に対する答えとして、(10a) が適切である。一方、what about x の x に対応していない要素が右方転移されると、非文法的であることが、Gundel (1977/1974:121) で指摘されている。

(11) a. What about the party on Saturday? *You better get it out before the party on Saturday, this spot in the rug.

b. What about your nerves? *He's beginning to get on my nerves, that dog.

(11a) では、what about x の x は the party on Saturday で、(11b) では、your nerves であるが、これらの x に対応していない this spot in the rug や that dog が右方転移されているので、非文法的となっている。これは、右方転移される要素は、旧情報でなければならないとする制約への違反である。

また、右方転移されている要素には、強勢が置かれてはならないことを、Gundel (1977/1974:121) は指摘する。²

(12) a. *It really depresses me, THIS ROOM.

b. *I swear I'll never be able to figure them out, WOMEN.

この現象も、右方転移される要素は旧情報でなければならないとする制約への違反として、説明することができる。

1.1.2. 属格名詞句の右方転移

右方転移要素は旧情報でなければならないとする談話機能上の制約に関連する現象として、属格名詞句 (genitive noun phrases) の右方転移がある。Huddleston and Pullum (2002:1412) は、属格名詞句とそれを含む名詞句が談話機能上の旧情報でなければならないことを指摘している。

² 強勢が置かれていることを示すために、大文字で表記することにする。

(13) a. There's John. *His whole family is obnoxious, that guy.

b. There's John's goofy sister. His whole family is obnoxious, that guy.

(13a)の文脈では、his whole familyは談話機能上の新情報であり、右方転移要素が旧情報でなければならないという談話機能上の条件に違反し、that guyの右方転移は認められない。一方、(13b)では、先行談話で John's sisterが導入されていて、この点で his whole familyは談話上の旧情報であり、条件が満たされ、that guyの右方転移は適格である。

日本語に関して、高見(1995)は、名詞修飾辞と修飾される名詞を分け、名詞修飾辞が文末に置かれる現象を考察し、名詞修飾要素が後置された文がすべて適格となるわけではないことを指摘する。この点を、(14, 15)を例に取り、考えてみよう。

(14) a. 突然、2メートルぐらいの大男が現われました。

b. 突然、大男が現われました、2メートルぐらいの。

(15) a. 太郎が言語学の本を書いたよ。

b. 太郎が本を書いたよ、言語学の。

(14, 15)では、名詞修飾要素「2メートルぐらいの」と「言語学の」が右方転移されて、適格である。ここで、疑問の焦点に係わる現象を考えてみよう。

(16) A. 太郎はどの国の音楽に夢中なんですか。

B1. 彼はイタリアの音楽に夢中なんです。

B2: *彼は音楽に夢中なんです、イタリアの。(高見 1995:238)

(16)では名詞句「どの国の音楽」の一部である「どの国の」が疑問の焦点であり、文中で最も重要度の高い情報、すなわち、新情報である。まさに、疑問の焦点に対応する「イタリアの」を右方転移することは、右方転移に課される制約(談話機能上の旧情報のみの右方転移が許される)に違反している。

1.2. 新情報としての右方転移要素

第1.1節では、Gundel (1977/1974), 久野 (1978), Rodman (1997/1974), Huddleston and Pullum (2002)の右方転移要素は旧情報であるとする分析とその根拠を概観した。本節では、高見(1995), 江口(2000), 中川奈津子・浅尾仁彦・長屋尚典(2007), Nakagawa, Asao and Nagaya (2008), 綿貫(2012)の分析、すなわち、右方転移要素には旧情報の場合と新情報の場合があるとする分析を概観することにする。

高見(1995)では、日本語の右方転移文(後置文)に対する機能論的制約(17)が提案されている。

(17) 日本語の後置文に対する機能論的制約：日本語の後置文において主動詞の後ろに現われる要素は、その文中で最も重要度が高い情報を表す要素以外のものに限られる。

(高見 1995:228)

(17)の仮説は、動詞の後ろに現われる要素は文中で最も重要度が高い情報以外のものであり、最も重要度が高い情報は動詞の前に必ず現れなければならないことを示し、右方転移(後置)文を、話し手が動詞の前で最も伝えたい重要な情報を伝達し、前半の部分で不足していたと考えられる情報を動詞の後で追加的に述べる構文であると特徴づけている。そして、動詞の後ろに現われる要素は最も重要な情報以外のものに限られるとする分析が提案されているが、高見(1995: 231)では、右方転移(後置)要素は、(i) 先行文脈から復元可能なもの、(ii) 発話の状況から容易に理解されるもの、(iii) 先行文脈からも発話の状況からも復元可能ではないため、重要度の高い情報ではあるが、最も重要度の高い情報としては解釈されないもの等、様々であることが指摘されている。ここで注目したい指摘は、(iii)の場合、すなわち、先行文脈からも発話の状況からも復元可能ではない場合でも、右方転移が認可される場合があるという指摘である。この点を、次の(18)を例に取り、考えてみることにする。

(18) a. 明け方やっと生まれました、男の子が。

b. 太郎は花子に買ってやったよ、10カラットのダイヤの指輪を。

c. 私言ったの、結婚したいって。(高見 1995:236)

(18)の例は、高見(1995:232, 236)によれば、先行文脈なしで唐突に発話された文として適格であり、右方転移要素は、先行文脈や発話の状況からは復元できない場合である。さらに、文の前半部分よりは重要度が落ちるものの、久野(1978)が指摘するような、確認のための情報ではなく、また、文の必須要素であるため、補足的な情報とも言い難く、重要度の高い情報であることが指摘されている。

江口(2000)では、久野(1978)や高見(1995)等の先行研究を取り上げ、研究対象として分析されていない右方転移(後置)文が存在することが指摘され、右方転移文を大きく三つのタイプに分類する分析が提案されている。三つのタイプの右方転移文の一つ目(タイプ1)は、久野(1978)が主張する右方転移文であり、先行文の省略は、発話時点で、明らかなコンテキストから復元可能であるということに基づき、省略されたものであり、後に確認のため、あるいは、文の理解に困難が生じる可能性があると判断され、追加される構文である。このタイプ1は、談話的省略に基づき、基底で生成され、旧情報を担う要素が右方転移(後置)されると特徴づけられている。右方転移文の

二つ目(タイプ2)は、高見(1995)が、右方転移要素が情報の重要度が高い要素である場合があると主張する右方転移文に対応する。このタイプ2の右方転移要素は、(18)の例文から、新情報を担う要素であると特徴づけている。タイプ1とタイプ2は、右方転移文の前半が省略文であることが共通しているが、タイプ2の右方転移要素は新情報であり、コンテキストから復元可能であることで省略されたのではなく、構文法的省略に基づき、基底で生成された構文であるとの分析が提案されている。江口(2000)が研究対象として分析されることがなかったと主張する右方転移文が三つ目(タイプ3)であり、久野(1978)や高見(1995)等で取り上げられることのなかったタイプの右方転移文であるとされている。このタイプ3の右方転移文は、意図的な語順操作で導かれる右方転移文であり、移動に基づき、情報の重要度の高い新情報を担う要素が右方転移される構文であるとの分析が提案されている。この点を、次の(19)を例に取り、考えてみることにしよう。

(19) a. おい、見たぞ、おまえがあいつに車の陰で金を渡しているところを。

b. きのう真夜中に電話がかかってきたんです、あなたと同じ名前を名のる人から。

(江口 2000:84/87)

江口(2000:84/87)によれば、相手に脅しをかけるねらいでやんわりと言われた(19a)、聞いている相手に緊張感を引き起こす(19b)は、話し手が伝えたい内容を本来の語順に納める時間的余裕が十分あり、語順を逆転させた背後には話し手の何らかの意図、すなわち、先行する部分よりもむしろ右方転移する部分に聞き手の注意を向けようとする意図があることが指摘されている。すなわち、情報の重要度という観点で見た時に、前半部分より右方転移要素の方が高いと考えることのできる右方転移文であることが指摘されている。

綿貫(2012:143-144)では、右方転移(後置)される情報は省略可能な情報であると分析する久野(1978)等の分析とは異なり、話し手の頭に最初に浮かぶ重要で緊急の情報が先に発話された結果、副次的な情報が後に発話されるという原理を提案する Simon(1989)の分析を支持し、右方転移される要素が文脈上解釈可能である場合(聞き手指向)と解釈不可能な場合(話し手指向)があるとする分析を提案している。解釈不可能な情報が右方転移される場合、最も話したい・聞きたい情報を発話した結果として省略された(一旦焦点から外れてしまった)情報を後置することで、その情報を再焦点化し、話し手が自己の発話意図を充足させる機能があることが論じられている。綿貫(2012)の右方転移文の分析において、右方転移要素には、文脈上解釈可能な情報と解釈不可能な情報、すなわち、旧情報を担う要素と新情報を担う要素があることが指摘されている。解釈不可能な情報が右方転移される場合を、(20)を例に取り、考えてみることにしよう。

(20)「夏期講座の打ち上げに行きました」と応答した後の発話

話し手 B: でもー、出るから、お金が。(綿貫 2012:144/145)

綿貫(2012:145)によれば、(20)は、話し手Aの発話「(夏講(夏期講座)の打ち上げに)行ったんですか」に、話し手Bが「えー、(夏講(夏期講座)の打ち上げに)行きました」と応答した後、「行った」理由を述べている発話で、ここでの右方転移要素「お金が」は文脈からは解釈不可能な情報(not-context-construable(CC))であり、この右方転移要素が省略されると、「出るから」だけになってしない、聞き手は意味を理解することができなくなる。この現象は、必須な要素が後置されていて、高見(1995)が提案する「日本語の後置文に対する機能論的制約(日本語の右方転移文において主動詞の後ろに現われる要素は、その文中で最も重要度が高い情報を表す要素以外のものに限られる)で捉える事のできた例文(18)と同様の現象であることがわかる。

2. 2種類の右方転移文

中川奈津子・浅尾仁彦・長屋尚典(2007)や Nakagawa, Asao and Nagaya (2008)では、右方転移文におけるポーズの有無(中川奈津子・浅尾仁彦・長屋尚典(2007))やイントネーションの違い(Nakagawa, Asao and Nagaya (2008))に基づき、右方転移文を2種類に分類している。

2.1. 右方転移文とポーズの有無

中川奈津子・浅尾仁彦・長屋尚典(2007)では、英語の wh 分裂文との平行性の観点からの分析が提案され、i) 既出の情報や周囲の状況から復元可能な情報を表す要素が後置されている場合には、ポーズが置かれられないのが自然であり、ii) 新しい情報を表す要素が後置されている場合には、ポーズを置かなければならないことが指摘されている。既出の情報や周囲の状況から復元可能な情報を表す要素が右方転移された場合と新しい情報を表す要素が右方転移された場合を区別することなく同列に扱う先行研究には不備があるとし、ポーズの有無による右方転移文の分類の必要性が論じられている。この点を、次の(21)を例に取り、考えてみることにする。

- (21) a.(= (1b)) 本当にダメだね、君は。
b.(= (18b)) 太郎は花子に買ってやったよ、10カラットのダイヤの指輪を。
c.(= (19a)) おい、見たぞ、おまえがあいつに車の陰で金を渡しているところを。

中川奈津子・浅尾仁彦・長屋尚典(2007)によれば、(21a)では、前半部分と右方転移要素の間にポーズが置かれられないのが自然であり、(21b, c)では、右方転移要素が重要な情報である限り、前半部分と右方転移要素の間にポーズが置かれなければならない。

中川奈津子・浅尾仁彦・長屋尚典(2007)に基づき、2種類の右方転移文の諸特性を整理すると、次のようにまとめることができる。³

³ 強勢が置かれていることを示すために、ゴシック体で表記することにする。

[A] 強勢を置くことができる

・ポーズが置かれない右方転移文

(22) a. ??かわいいねこれは。

b. ??それは違うと思うんです私。

・ポーズが置かれる右方転移文

(23) a. いちばん走るのが速いよ、次郎が。(総記のガ)

b. 犯人だよ、次郎が。

(24) a. おいしいです、これは。(対比のハ)

b. そう思います、私は。

[B] 質問の答えになる

・ポーズが置かれない右方転移文

(25) a. それで次郎はどうしたの？走って逃げたよ次郎は

b. それで誰が走って逃げたの？#走って逃げたよ次郎 が / は。(総記のガ；対比のハ)

・ポーズが置かれる右方転移文

(26) a. 山田さん、いつ旅行に行ったの？どこに？

b. A: 誰がいつハワイ旅行に行ったの？

B: 鈴木さんが行ったらしいよ、この間。

[C] 総記のガ；対比のハ

・ポーズが置かれない右方転移文

(27) a. *いちばん走るのが速いよ次郎が。(総記のガ)

b. *犯人だ次郎が。

(28) a. #おいしいですこれは。(対比のハの意味がなくなる)

b. #そう思いますわたしは。

・ポーズが置かれる右方転移文

(29) a. いちばん走るのが速いよ、次郎が。(総記のガ)

b. 犯人だよ、次郎が。

(30) a. (あれはまずいけど) これはおいしいです。(対比のハ)

a'. おいしいです、これは。

b. (他の人は知らないけど) 私はそう思います。

b'. そう思います、私は。

(22-30) で示された諸特性から、ポーズが置かれない右方転移文では、i) 後置要素には強勢を置く

ことができない (22), ii) 質問の答えになれない (25), iii) 総記のガ(焦点)を後置することはできない (27), iv) 対比のハを後置することはできない (28) ことがわかる。他方、ポーズが置かれる右方転移文では, i) 後置要素に強勢を置くことができる (23, 24), ii) 疑問の焦点や質問の答えを後置することができる (26), iii) 総記のガや対比のハを後置することができる (28, 30) ことがわかる。このことから、久野 (1978) が分析対象としている右方転移文と高見 (1995) や江口 (2000) が分析対象としている右方転移文は明確に峻別されなければならない構文であることがわかる。

2.2. 右方転移文とイントネーション

Nakagawa, Asao and Nagaya (2008:22) では、右方転移文の情報構造に対して、イントネーションの違いに基づく考察が加えられている。そして、右方転移文の情報構造は、前置要素と後置要素の音声的特徴に基づき、2種類に分類することができるとする分析を提案している。そして, i) 前置要素と後置要素が1つのイントネーション曲線からなり、前置要素にのみ、ピッチと音量の上昇が見られるタイプの右方転移文(後置要素下降型)の後置要素は旧情報であり, ii) 前置要素と後置要素がそれぞれ独立のイントネーション曲線からなり、それぞれにピッチと音量の上昇が見られるタイプの右方転移文(後置要素山型)の後置要素は新情報であることを明らかにした。この点を、(31)を例に取り、考えてみることにする。

(31) 後置要素下降型：

- a. 本当に だめだね 君は。
- b. やって あげましょう 私が。

後置要素山型：

- a. あたし言ったの 結婚したいって。(cf. 高見 1995: 232)
- b. 山田さんって お土産に 何を買ったの？誰に？

(Nakagawa, Asao and Nagaya 2008:6)

(31) から明らかなように、旧情報を伝える後置要素を伴う右方転移文(後置要素下降型)では、ポーズが置かれることがなく、単一の音調(a single coherent contour)で、主節にのみピッチの高み(pitch and intensity rise only in the main clause)が置かれる。他方、新情報を伝える後置要素を伴う右方転移文(後置要素山型)では、前置要素と後置要素の間にポーズを伴う二つの異なる音調(two distinct coherent contours)で、後置要素と主節の両方にピッチの高みが見られることがわかる。

また、このような対立に基づき、(32, 33)の話し手Aに対する発話Bと発話B'の違いに説明を与えることができる。

- (32) A: あのお寿司屋さん 美味しい？ (「米」は新情報)

B: ??美味しいよ 米は。(後置要素下降型)

B': 美味しいよ 米は。(後置要素山型)

(33) A: 僕 米 嫌い。(「米」は旧情報)

B: 美味しいよ 米は。(後置要素下降型)

B': ?美味しいよ 米は。(後置要素山型) (Nakagawa, Asao and Nagaya. 2008:7)

(32) の話し手 A と B との発話では、「米」は新情報であり、(32B') のように、前半部分と後置要素のそれぞれに音調曲線が生じる後置要素山型でなければならない。(32B) のように、ピッチの高みが置かれない後置要素下降型は許されない。他方、(33) の「米」は旧情報である。文法性は (32) とは逆で、後置要素にピッチの高みが置かれない後置要素下降型でなければならない。(33B') のように、後置要素山型で強勢が置かれることは許されないのである。

3. 結語

本稿では、i) Gundel (1977/1974), 久野 (1978), Rodman (1997/1974), Huddleston and Pullum (2002) の右方転移要素は旧情報であるとする分析と ii) 高見 (1995), 江口 (2000), 中川奈津子・浅尾仁彦・長屋尚典 (2007), Nakagawa, Asao and Nagaya (2008), 綿貫 (2012) の右方転移要素には旧情報である場合と新情報である場合があるとする分析を概観した。特に、中川奈津子・浅尾仁彦・長屋尚典 (2007) や Nakagawa, Asao and Nagaya (2008) のポーズやイントネーションの違いに基づき、2種類の右方転移文を区別する必要があるとする分析は、新たな観点からの重要な研究成果であるように思われる。今後は、2種類の右方転移文の違いが何から導き出されるものであるのかを明らかにする必要がある。

参考文献

- Abe, Jun. 2004. "On Directionality of Movement: A Case of Japanese Right Dislocation," *Proceedings of the 58th Conference*, 54-61, The Tohoku English Literary Society.
- 江口 巧 2000. 「日本語の後置文 — 情報提示の方略 —」『言語文化論究12』81-92, 九州大学大学院言語文化研究院
- Endo, Yoshio. 1996. "Right Dislocation," *Formal Approaches to Japanese Linguistics 2* (MIT Working Papers in Linguistics 29), 1-20.
- Fukutomi, Yasuyuki. 2006. "An Antisymmetric Analysis of Japanese Right Dislocation," 『言葉の絆 (藤原保明博士還暦記念論文集)』, 312-325, 開拓社
- Gundel, Jeanette K. 1974. *Role of Topic and Comment in Linguistic Theory*, Doctoral Dissertation, Ohio State University (Reproduced by the Indiana University Linguistics Club, 1977).
- Haraguchi, Shosuke. 1973. "Remarks on Dislocation in Japanese," ms., MIT.
- Huddleston, Rodney, and Pullum, Geoffrey K. 2002. *The Cambridge Grammar of the English Language*, Cambridge: Cambridge University Press.
- 久野 瞳 1978. 『談話の文法』大修館書店

- 黒木暁人 2006.「日本語右方転移文の構造について：左方移動分析の観点から」*Scientific Approaches to Language* 5, 213-231, Center for Language Sciences, Kanda University of International Studies.
- 中川奈津子・浅尾仁彦・長屋尚典 2007.「日本語における右方転移構文と分裂文の機能」日本言語学会第135回大会ポスター発表
- Nakagawa, Natsuko, Asao, Yoshihiko, and Naonori Nagaya. 2008. "Information Structure and Intonation of Right-Dislocation Sentences in Japanese," *Kyoto University Linguistic Research* 27, 1-22.
- Rodman, Robert. (1997) "On Left Dislocation," *Materials on Left Dislocation*, 31-54, edited by Elena Anagnostopoulou, Henk van Riemsdijk, and Frans Zwarts, Amsterdam: John Benjamins. (*Papers in Linguistics* 7, 437-466, 1974)
- Simon, Mutsuko Endo. 1989. *An Analysis of the Postposing Construction in Japanese*, Doctoral Dissertation, the University of Michigan.
- 高見健一 1995.『機能的構文論による日英語比較―受身文、後置文の分析―』くろしお出版
- 綿貫啓子 2012.「後置文の意味機能から探る話し言葉の生成のしくみ」*Scientific Approaches to Language* 11, 137-158, Center for Language Sciences, Kanda University of International Studies.